

医学部学士編入学者選抜のための 総合試験の開発とその評価

伊藤 圭ⁱ 林 篤裕ⁱ 椎名久美子ⁱⁱ 大澤 公一ⁱⁱⁱ
 石井秀宗ⁱⁱⁱ 柳井晴夫^{iv} 田栗 正章ⁱ 岩坪 秀一^v
 赤根 敦^{vi} 麻生武志^{vii} 岩堀淳一郎^{viii} 内田千代子^{ix}
 川崎 勝^x 齋藤宣彦^{xi} 武田 龍司^{xii}

近年、大学入学志望者の社会的及び教育的背景の多様化が進み、入学者選抜方法の多様化及び受験者の能力の多面的な評価の必要性が生じている。このような状況に鑑み、本研究では、教科科目の学習到達度を測る現行の共通試験とは異なり、論理的思考力、推論・分析力、コミュニケーション能力、読解・表現力等の総合的な能力・資質の測定を目的とした総合試験の試作問題を開発し、モニター調査による評価

を行った。

現行の学部入試における総合試験問題の利用は、医学系や教育系など、高校での履修科目の学習内容が大学入学後の専門教育の内容に直結しにくい学部で比較的多く見られる。特に本研究では、総合試験問題の利用に対する意識が比較的高い学部で、実際に共通試験に近い形で総合試験が利用される可能性を考慮し、医学部学士編入学者選抜における使用を想定した教科・科目

- i 研究開発部試験臨床研究部門（現 試験基盤設計研究部門）
- ii 研究開発部適性試験研究部門（現 試験評価解析研究部門）
- iii 東京大学大学院教育学研究科
- iv 研究開発部試験臨床研究部門（現職 聖路加看護大学）
- v 早稲田大学人間科学学術院
- vi 関西医科大学法医学講座
- vii 東京医科歯科大学
- viii 高知大学医学部
- ix 茨城大学保健管理センター
- x 山口大学医学部医学教育センター
- xi 聖マリアンナ医科大学（現職 国際医療福祉大学付属三田病院）
- xii 元 富山医科薬科大学

フリー型の総合試験問題を作成した。

総合試験は、情報把握力及び論理的思考力を測る問題（第1部）とコミュニケーション力、読解力、表現力を測る問題（第2部）の2部構成となっており、いずれも、医学科の教員に対するアンケート調査（平成16年度に実施）の結果に基づき、入試で測定する必要性が高いと判断された能力を測ることを意図したものである。

試作問題を評価するためのモニター調査は、平成17年6～7月に全国43大学の文系、理系、医学系の学部3～4年生から募集した753名を対象に実施した。

モニター調査では、第1部「情報把握・論理的思考」と第2部「コミュニケーション・読解・表現」の総合試験の他に、その信頼性及び妥当性を評価する基準として大学入試センター試験の過去の問題から構成した「英語」の試験及び能力や適性等に関するアンケート調査を実施した。

モニター調査の結果、総合試験の難易度については、第1部と第2部のどちらも得点率60%程度に相当する平均点が得られ、ほぼ目標とおりの難易度となっていることが確認されたが、学部系統別に見ると第1部の問題では理系の成績が高くなる傾向が見られ、逆に第2部の問題では文系の成績が高くなる傾向が見られた。また、設問得点

と総点との相関係数によって設問の識別性についてチェックしたところ、第1部の方が第2部よりも識別力が高いことが分かった。

試験の信頼性については、各試験のアルファ係数（50項目相当）を算出して内部一貫性をチェックした。その結果、英語の信頼性係数が0.845と最も高かった。第1部については0.820で、英語とほぼ同程度の高い信頼性が得られたが、第2部については0.653で、それほど高い信頼性は得られず、この種の問題でより設問間の相関を高めることが今後の課題となった。この点に関する詳細な議論は赤根他による別稿（大学入試センター研究紀要第35号に掲載）を参照されたい。

さらに、第1部と第2部の設問が測定する能力特性が分離されているか、選抜試験として機能するか、測定対象として意図した能力が測定されているかなどについても検討を行った。まず、第1部と第2部の相関係数が0.460と著しく大きくはないことなどから、総合試験で測定対象としている能力が第1部と第2部で適度に分離されていることが確認された。また、第1部と第2部共にセンター試験の得点率及び模擬試験の偏差値等に基づいた入試難易度との間に高い相関が見られ、選抜試験としてもある程度機能することが推測された。

次に、アンケート調査に含めた「優れた医師に求められる47の能力・資質」の習得度について因子分析を行い、6因子（①情報処理・数理的素養、②創造力・多元的判断・論理的思考、③読解力・表現力、④対人的親和性・献身性、⑤自然・社会・人間への関心、⑥芸術への関心）を抽出した。それぞれの因子に対応する尺度得点と総合試験の得点との相関を調べた結果、第1

部と「情報処理・数理的素養」の因子との相関係数が0.363、第2部と「読解力・表現力」の因子との相関係数が0.221で、いずれも1%水準で有意であり、今回の総合試験がほぼ意図した能力や資質を測定していることが確認されたが、コミュニケーション能力を十分に測定するためには、問題の内容及び形式をさらに改善していく必要があることが今後の課題となった。